古河文化見聞録

悪疫退散の願い
～昭和初期に復活する悪戸新田獅子舞～

古河公方足利氏に由来し、古河市指定文化財にもなっている悪戸新田獅子舞。雀神社の祭礼に登場します。

明治時代に中断されてからのち、昭和元年の疫病流行をきっかけに翌2(1927)年に復活したもの。いつもなんとは無しにそんな説明文を読み、曖昧な記憶をもとに、ほかの人にもそのような説明をしていたのですが、よくよく考えると、大正15(1926)年が12月25日に終わり、昭和元(1926)年は26日に始まって31日まで。そういえば昭和元年が6日間であったことを忘れていました。

これは、この前後をもう一度見直してみる必要もあろうと、当時の新聞を読み返してみました。

大正15年(昭和元年)の世相

まずは、悪疫流行のあったとされる大正15年(昭和元年)。この年は近年まれに見る日照りの年であったようで、5月には「田の中が丸でコンクリート」といわれ、旧新郷村・勝鹿村・岡郷村の田はコンクリートのように固まってしまったようです。水不足に困ったあげく、近隣の町の銭湯では、風呂の湯を節約するために混浴にしてしまい、警察から大目玉をくらったとも。こんなときには、これを救う霊験あらたかなものも登場し、ある寺院では寺宝「龍の尾」なるものの蓋を開いて、たちまち雨が……。降り過ぎて床下浸水の家もあったほどだと。

そんななか疫病はどうかというと、町をあげて種痘の励行、腸チフスの予防注射、ペスト対策のネズミ取りを行っていたためか、大きな流行を見せることはなかったようです。とはいっても、古河町においては5月に赤痢で6歳の少女が死亡するといった悲しい出来事もありました。また、7月～9月に7名のチフス患者を出し、うち1名が亡くなっています。

獅子舞復活の昭和2年

ところで、獅子舞復活の年にあたる昭和2年ですが、なにやら年の初めから不穏な空気が漂っていました。

1月には、深夜にガタガタと障子が震動する家がある、妖怪が住んでいるんじゃなかろうかという噂。調べてみるとそれは汽車の震動であったと。騒ぎがおさまると、町のなかに夜な夜な火柱が現れる。これはよく見ると、犬が集まって天に向かって遠吠えをしていたのだと。そうかと思うと竹藪から白い化け物が……。これは売出しのビラ。「化物の正体見たり枯をばな」(横井也有)のはずなのに、気持ちが怪しい世界へ入ってしまっている。

そして3月に入ると、あちこちの辻にボタ

▲渡良瀬川堤防前での獅子舞奉納(昭和6年)